

秋の夜長に読書と洒落込む私です。どうもこんばんは。秋だからというわけでもないのですが、本を手に取りたくなくなりました。日がなぼーっとしていた時です、ふと気がついた。最近本を読んでない、あー読んでない、いつから読んでないか忘れるほど読んでない、流石に読みたくなってきた。ネットニュースばかり読んでる私は、AIが書いたか誰が書いたか分からんような文章から離れ、一人の作者の作品を熱意のこもった文章を読もう読もうではないか。そんな取るに足らない工せ決意を胸にネットニュースを読んでいました。「せなけいこ」死去のヘッドラインが目に入る、せなけいこ？なんか聞いたことあるだれだっけ？そう思いながら記事に目を通すと、ああ思い出した「ねないこだれだ」の作者だ。この絵本はうちにもあった、おばけが表紙の黒い絵本。絵はかわいらしいけどちょっぴり怖かった記憶がある。そんな事を思い出しながら、せなけいこで検索をかける。絵本だけじゃなく自叙伝的な作品もあるようだ、電子書籍版もあるぞ、オススメレビューも悪くない、即ポチる。そんなこんなで「ねないこはわたし」を読むことになりました。

自叙伝的作品でもあるので作者の生い立ちから仕事、結婚、子育てと一通りのライフストーリーを歩みながら作品が生まれていく過程を描いてくれています。どんな気持ちで絵本を作ったか、アイデアはいつ生まれたか、なぜ作家になったか、このあたりの話もあるので何か作ってみたいと考えている人にも参考になる所はあるかと思えます。戦中疎開を経験した世代でもあるので現代の事情とはだいぶ違いがありますが、人間一人が歩いてきた道のりは性別世代関係なくなるとなく「あ、これわかる」といった共感をもたらすのではないかなとテキトウに思っています。本の構成として生立ち、絵本の生まれた背景、同時に読者に対する問いかけ語りかけ投げかけがあります。間には絵本で使った貼り絵などが散りばめられ読書する本というよりは絵本型のエッセイのようでもあります。全体の分量としては多くなく、20分もかからず読めます、早い人だと10分かからないでしょう。サラッと読めるが故に読者は選びません。おそらく昔子供であればどなたでも、むしろ子供だった大人に向けて書いてある気がします。作者は長い間子供向け絵本を作り続けてきました、だからというわけでもないでしょうが語り口は柔らかく何かを否定することなく、でも嫌なものは嫌、可愛らしく楽しく、大人の母親のような目線をもつ子供とでも言える、作者の語り口をまとめるのは難しいですね、雰囲気でも伝わればと思います。とりあえずブックレビューのような文章はここまでしておきます。

ええねえ、読書感想文を書くのはいつ以来やろうかねえ。小学校以来やないろうか。書かれたものを読み込んで違う文章にして書き出していく作業もわるうないねえ。そのうち違う読書感想文もかけるがやないろうかと、つき始めた自信と言う名の負債を将来に投げちょこうか。明日にはめんどくさいとか言うに違いない。

私は何かしら文章を読むとき、書かれた言葉の意味や文脈、書かれてない事、それらを読み取りながらその文章で作者は何が言いたいのか意図している事は何か意図せず露出している事は何だろうか、この文章の本質的な事は何だろうかと考えてしまう。インターネット上の情報には事実と同時に虚偽、不正確な情報、作為的な煽動、妄想に想像まで、ごった返している。たくさんの情報から必要な情報を素早く見いだすにはどうしても本質性をつかまないと手に入れることは難しい。

今回の本はネットの文章を読むときはよりは疑わず読んでいたがネットと同様に本質的な部分を取り出してみた。いくつかは上記ブックレビューの所に書いている。もう一度取り上げてみよう。この本は誰に向かって書かれたのか、これは間違いなく過去に作者の作品を読んだ、味わった人です。つまり昔子供だった大人というわけです。昔子供だった大人の中には作者自身もおり自身の半生を振り返りながら、「この絵本はねこんな想いで書いたの」と裏側も書き込んで

います。「ねないこだれだ」の事も書いてあります。夜更かして寝ない子はおばけになっておばけと一緒におばけの世界に飛んでいく話、これがねないこだれだのストーリーです。親が子供を早く寝かせるために作られた本のように思えますが作者は違う意図で作りました。子供はおばけが好きだから、おばけになって、おばけの世界に飛んでいくのはおもしろいだろうと思ったそうです。確かに子供はおばけが好きです、小さい頃には見えていたおばけは次第に見えなくなってしまう。おばけは怖いけどそばにいてくれて、なんだかかわいく、そしておもしろい。作者の言うおばけは妖怪の類から幽霊や精霊のような存在までを言っているようです、今ではイマジナリーフレンドと言う事もできそうですね。作者は昔子供だった大人へ「私はこんな子供だった、大人になって子育てもした、自分の子供が大きくなったら公園や保育園の子供たちをみてた」と語り、「あなたはどんな子供だった？なんでもいやになることなかった？なぜだか泣きたくなることない？」と問う。子供向けの絵本作家である作者が子供たちをよく知っているのは自然なことでしょう。おそらくは現代の子供たちの様々な境遇や社会環境における子供の立場の変化も見えていたはずですが。その上で問い語るということはどういうことか。昔子供だった大人たちにもう少し自分を振り返ってみるのはどうだろうか、そう言っている気がします。作者自身は裕福で家柄の良い非常に恵まれた家で育っているため子供の事や付き合い方育て方を語るのは上から目線の物言いになる、作者に言えることは素直に経験を語る事、そうすることで今の子供たちとどう付き合っていくのかの気づきを与えてくれていると私は思いました。下手な育児本よりはるかに学べるかもしれません。

次に作家性の事でも書こうと思ったのですが急に手が止まります。書いては消すを繰り返す。なんぞこれ、ぴったり画面とにらめっこして動けなくなっちゃう。どうにもこうにも他におもしろいことやりはじめたら書くことに切り替えるの難しいみたいやねえ。やりくさし書きくさし中途半端でどうもすんまへん。こっからはちつくと強引に、せなけいこさんの情熱について書いてみるぞね。

せなけいこさんは絵を描くのが大好きな子じゃった。子供の頃はまだまだ戦中で紙が貴重、白い紙らあ無いがよ、それやき父ちゃんの字ばっかりかいちゅう本にしながら絵を描いたと。うもうに書けたき母ちゃんに見せちゃろう思うて見せちゃったがよ。ほいたところがこじやんち怒られたと、そりやそうながやけんどそれで絵に描く事はやめんかった。子供やき何にでも落書きするもんやけど文字に絵を上書きするって考えたらちつくと含蓄があるとゆうか口クンロールとでもゆおうか、ビルドアンドスクラップてゆうたちかまんような。そんなこと本人は思うちゃあせんろうけんど絵を描くことについては内なる火がついちゃったがやろう。疎開先でさびしゅうても先生が絵を描く紙をくれたもんやきうれしさのが勝つてもうて喜んで思いつきり描けたがをおぼえちゅうそうな。学校行きよつても勉強は好きながしかやらん、絵ばっかり描いておりよつた。だいたい良家のお嬢様が勉強せざつたらお母ちゃんが「ちゃんとせないかんぞね」と誰からもみても恥ずかしくないように教育するもんやけどあんまり聞いてなかつたみたいやね。絵描くがが好きすぎる。お嬢様なもんで一貫校で大学までエスカレーター。けんど、せなけいこさんは高校卒業と同時に進学せんとう宣言した、「もう家の世話にはならん、働いて自立するわ、絵描きで食ってきたい。」と。ほいたら母ちゃん怒るわねえ、ちゃんとした学校行って、恥ずかしくない教養身につけて、ええとこのお家のお嫁さんになるがが幸せ、そう信じる母ちゃんとは真逆に行きだいたき。だいぶ止められたろう、普通じゃないき。けんど本人は決めちよつたがやと、もっと小さな子供のときに絵描きになるのを決めちよつた。やき止まらんし逆に止められれば止められるほど決意は固まったろう。母ちゃんに反対される経験は本人の情熱に油を注ぎその後しんどい事があつても乗り切れる力になったみたいやね。おもしろいがは本人談、だからと言って母ちゃんに感謝しちゅうかゆわれたら困っちゃう、とのこと。やりたいこと止められたら嫌よね嫌なことされ続けたき負けん気が育つたかも分からんけど嫌なもんは嫌、ここに本人の素直さが現れちゅうろう。もしかしたら信じることに1直線ながは母ちゃんゆずりかもしれんね。とはゆうもんの就職先は親戚のツテで日本銀行になるがやけんど。父ちゃんが心配して手を回したに違いな

い。とりあえずは働きもって絵の勉強をしたと。独学でもやっただろうけど先生に教えてもらう事にした。その先生、師匠は幼い頃に絵本作家になると決めることになる絵本を描いた武井武雄。直接本人に会いに行つて「一生の仕事にしたい絵を教えてください」と弟子入りした。厳しい師匠やってみたくてダメ出しだけで1回も褒められた事がなかったと。けんどう一生懸命食らいついていて教えてもらおうたそう。私も絵の勉強の事はわからんけんどう創作物についてちくとゆうてみると作家の表現方法が定まるにはどうしてもいらんもんを削り落とす方法を取ることがあるがやないろうか、それでも私はこの絵の描き方をやめんといいところまで削って削っていく作業を師匠はとったがやないろうか。実際、せなけいこさんの絵本は多くが貼り絵で作られちゆう、スタイルが決まっちゃかんと長い間同じ表現方法をとらんとおもうき「私はコレ」と決めさせる、師匠の作業はスタイル決めを担当したのかもしれない。絵の描き方なんて無数にあるきどれかを決めるのも大変よ。描き手におうちゆうかどうかも描いて描いてやってみざつたらわからんしねえ。それがよかったか悪かったかわからんけんどう最初に世に送り出す絵本で賞をもらうたそう、すでに絵の仕事はしよつたけんどう初めての絵本が賞をもらうた事は喜ばしいと同時に周りの妬みももらうた。けんどう気にせざつたと、だつて絵本作家になりたかつたがやもん。やとさ。誰に何ゆわれたち絵を描いて、褒められんでも自分の表現を磨き、結婚出産子育てと状況が変わつたち、好きな事を続ける。どうじゃろうか彼女の情熱がちつとは伝わつたらえいけんどう。

本作の語り方はもっと優しげで私みたいにざつとしちゃあせん。人柄が伝わってくるような表現が多い。本質的なところやと思うがを二つばあ抜き出した。でもねえ本質なんてどうでもえいかもしれん。そんな気にさせるがよねえこの本。急いで重要な部分を取り出す、使えない部分は捨てる、そんで分かつた気になる。そんなんが本当にどうでもえい気になる。作者がこの本を書いたのはだいぶ高齢になつた時、老齢とゆうたちまちごうちやあせんと思う。作者が今まで生きてきた道のりをのんびり眺めて思う、本質もよし悪しも分析も要不要もくだらん事じゃないろうか。なんかおもしろいきおもしろかつたです、終わり。これが感想文でえいろう。後はおばけに任そう。作者は頭の中でおばけが飛び回つておるそう、*「ねないこだれだ」*の中で寝ない女の子はおばけの世界に飛んでいく、それは死後の世界とは別でおばけにはおばけの世界があるそうです。作者はそこに行つてみたい、だから描いた。もしかしたら作者は今頃行きたかつたおばけの世界におるのかもしれないねえ。R.I.P.